

「ルターの薔薇」の成立事情

蜷 川 順 子

はじめに

早速お話に入りたいと思いますが、私が本日扱うのは、今画面に出ている「ルターの薔薇」[図1] と呼ばれるルターの紋章の成立事情に関する問題です。

ここでお見せしているのは、現在ベルリン大聖堂のファサードに掲げられているモザイクのパネルです。ベルリン大聖堂というのはルーテル（ルター派の）教会、福音主義教会としてドイツで一番大きな規模の聖堂で、ベルリンではあらゆる教会の中で一番大きな聖堂として知られています。



〔図1〕「ルターの薔薇」モザイク・パネル
ベルリン大聖堂、ファサード

この聖堂は、1450年にブランデンブルク選帝侯の宮廷礼拝堂として、その基礎がつくられました。その後教区司教座聖堂になりましたから、宮廷だけではなくて都市住民の教会としても機能したのですが、1535年に一このときは、もうルターの宗教改革が始まっています—新宮廷礼拝堂として、それまでの教会からまた移されたのが、現在の聖堂があるところです。

ホーエンツォレルン家というドイツの名門諸侯の名前を御存じかと思います。彼らの墓も聖堂の地下におかれています。新しい礼拝堂が作られて間もない1539年に、ベルリンを治めていたヨアヒム2世がカトリックからルター派の福音主義に改宗しました。それ以来ずっと福音主義教会として機能し続けた聖堂なのです。

その後も建築上の変遷がありますが、クーポラという丸屋根がある現在の建物の基礎は、1905年にヴィルヘルム2世によって作られました。しかしながら、第2次世界大戦時の爆撃によって壊滅状態になり、1993年に大がかりな修復がなされて、今の姿になっているのです。

そのファサードの、向かって右側にあるのが「ルターの薔薇」、左側にあるのが、「イバラの薔薇」のモザイクです。薔薇というと、今のドイツではおそらく、このようなイバラ、苦難の中で花開く信仰という意味で捉えられることが多いのですが、さて、「ルターの薔薇」はどのようなかというのが、私の本日の疑問点、出発点となります。

この聖堂は現在博物館になっていまして、聖堂内の4つの彫像をまとめた展示物では、ツヴィングリ、ルター、メランヒトン、カルヴァンといった、それぞれ違う立場で宗教改革の立役者となった人々が示されています。

また、当時の4人の諸侯を集めた展示物では、最初のルター派公国となったプロイセンのアルブレヒト、今お話ししたベルリンの支配者でルター派に改宗したヨアヒム2世、ルターを応援したフリードリヒ賢公、それから最初にルター派の学校を建てた、ヘッセンのフィリップ1世が並んでいます。

そういう諸侯たちの姿に続いて、1539年にヨアヒム2世がルター派に変わったときの旗印が示されますが、ここで既に「ルターの薔薇」が諸侯の旗印となっていて、実際にもこのように使われたということがわかります。

「ルターの薔薇」には、今見ていただいたベルリン大聖堂のもの以外にもたくさんタイプがあります。今年の2月から4月にかけてベルリンの州立図書館で、ルター派の95点の資料が展示された『聖書、論題、プロパガンダ』という展覧会が開催されましたが、そのときのカタログの裏表紙は、数十種類のタイプのものでデザインされています。薔薇の花の花びらの形や数を調べている研究者もいるそうで、なかなか興味深いものです。

実際、「ルターの薔薇」は、さまざまなタイプのものをいろいろなところで見ることができます。たとえば、ヴィッテンベルクの城教会もそのような場所のひとつです。城教会には、ルターが95カ条の論題を張り出した扉があります。



〔図2〕「95カ条の論題」レリーフ
ヴィッテンベルク、城教会

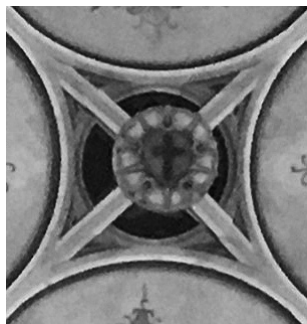
トがある「ルターの薔薇」が取り付けられています〔図3〕。また説教台の向かいにも、別のタイプのものが設置されています。こうしたことから、これが正しいタイプというひとつのものが決まっているわけではないようです。

ドイツでは宗教改革500周年ということで、500年に一度の休日というのが11月初めの火曜日にあったそうです。国を挙げてのお祝いがなされる中で—今年からというわけではありませんが—「ルターの薔薇」の絵はがきが販売され、そこにルターが1530年に友人のシュペングラー宛の手紙で紋章の意味を記した説明文が、掲載されています。皆さんのお手元のハンドアウトに、この説明文のドイツ語版と『ルターと宗教改革辞典』（教文館）から引用した訳文を掲載しています。

ここまでベルリン大聖堂のファサードを出発点として、「ルターの薔薇」を公的なルター派の紋章として取り上げましたが、ここからはルター個人やルター

この教会は火事のために焼失し、その後記念すべき扉〔図2〕が、論題を刻んだ青銅レリーフとして19世紀に再建されました。扉上部には、十字架にルターとメランヒトンがひざまずいている絵が掲げられています。カトリックの図像でしたら、十字架の両側には伝統的に聖母マリアと福音書記者ヨハネがいるところですが、宗教改革後のプロテスタントの図像では、このように変わったということがわかります。

城教会の内部では、天井のリヴの交差点毎に、花卉の中に十字架を抱いたハー



〔図3〕「ルターの薔薇」天井装飾
ヴィッテンベルク、城教会

家の紋章として生み出された経緯をさかのぼることにします。

ルターがこういう紋章を使った時代というのは、ドイツというより、フランスを起点としてドゥヴィーズと呼ばれる個人標章が流行し、遊び心あふれる紋章や標章がさかんに作られた、そのような時代でした。おそらくは個人標章的なものだったと思われる「ルターの薔薇」の起源に、クラーナハの「ペスト図」のイメージがあるのではないかと考えていますので、それも合わせて紹介します。このように考える理由は、最初に御紹介いただきました聖心（みこころ）、つまりハート形の研究にあります。ハート形のイメージの伝統があって、そこから派生したのではないかというのが自説です。これも後ほど少しだけ披露させていただきます。

「ルターの薔薇」の説明文

先に触れた「ルターの薔薇」の説明文には、ルターがどうして薔薇を使うのか、薔薇の意味をどのように考えているのか、色の意味をどうとらえているのか、そうということが細かく述べられています。ルターが書いている「私の紋章」の原語Petschaftは、封書を封印する際に使う「印章」の意味のほうが強いようですが、一般に紋章と訳されているので、ここではそのまま紋章とします。

色については、「自然の色をした心臓」「黒い十字架」「白い薔薇」「空色の地」「金色の輪」というふうに、先ほどの絵はがきで見ていただいた色づかいが、ルターの手紙の中に書かれている通りであることがわかります。

この手紙には1530年7月8日の日付があります。1530年は重要な年です。ルターに対しては1521年にヴォルムス勅令とあって、「ルターの本を読んではいけない」とか、「ルターは国にいても保護されない」という内容の、ルターを罰するような法令が皇帝から出されていました。それは一度緩和されましたが、もう一度ヴォルムス勅令を厳しく施行することになったため、諸侯たちが怒って、「抗議」や「表明」を意味するプロテスタティオ文書を帝国議会に提出したのが29年です。したがって、こういうふうに自分の紋章について色や意味を説明した30年は、

プロテスタント派が団結し、アウクスブルク帝国議会に信仰告白を上程するなどの過程で、まさに彼の私的紋章がプロテスタント派の公的な旗印となろうとした年だったのです。

ただし、1530年のこの手紙の内容が、直ちに広まるわけではなかったようです。また、早い時期の例に鑑みると、「ルターの薔薇」がシュペングラーのために説明文を書いた時よりも、かなり前からあったということがわかります。

ルターの生い立ち

ルター家やルターの紋章を扱う前に、簡単にルターの生涯を辿っておきたいと思います。ここで出てくる地名は、ベルリンとライプチヒの間の比較的近接した場所にあります。

ルターはザクセンのアイスレーベンというところで生まれます。父ハンスの名字はルターではなくルッダーと書かれることもあり、史料の上ではつづり方はいろいろあるようで、現在はLutherと書かれますが、thのところはdになったり、dhになったりしていたようです。初めから名字があった家ではなかったということを意味するのかもしれませんが。

ハンス・ルターは、アイスレーベンにいたときは農民として自分を位置づけていました。その後ルターが生まれてから1年もたたないうちに、そのすぐ北のほうにあるマンスフェルトというところに移り住みます。マンスフェルトでは鉱山で働いており、やがて自身で土地を持ったり、鉱山の権利を入手したりという具合に、すごく働いて、頑張って、社会の中で地位を築き上げた、そういう人物だったと知られています。

母のマルガレーテ・リンデマンの家はやや裕福な家柄で、親戚の中に弁護士がいたり、医者がいたり、大学教授がいたりという、少し上流の家系だったことがわかっています。ルターの紋章は、この父母の紋章に関係があるのではな

いかと考えられるため、少し詳しく御紹介しました。

マンスフェルトに移住した後のルターは、もう少し北のほうの都市マクデブ

ルクやアイゼナハを転々と、マクデブルクでは4年、それからアイゼナハで1年ぐらい学んで、その後1501年にエルフルト—あるいは、本によってはエアフルトと書いてある本もあるかと思います—の大学に入学することになります。

このように、父ハンスはマルティンに高度な教育を受けさせようとしめます。それはやはり母方の家の人たちが立派な職業についているので、あの方々みたいに弁護士や法律家になってほしいと、そういうふうに思っていたようです。エルフルト大学に入学して—伝説の域を越えないかもしれないのですが—あるとき実家に帰って、それからエルフルトに戻る途中で落雷にあい、もう死ぬかと思う、そういう体験をルターはしたようです。その死ぬかと思うときに、マリアのお母さんに当たる聖アンナにお祈りをして、「どうぞ助けてください。助けてくださったら、私は修道士になります」という誓いを立てたそうです。

ルターはその体験の後、誓ったとおりにあウグスティヌス隠修修道会戒律厳守派という、エルフルトに数ある修道院の中でもしっかり戒律を守りましょうという厳しい方の修道会に入り、修道生活を送ることになります。さまざまな伝記では、このときもまだ修道士としての道に迷うところがあって、迷う中で、いわゆる福音主義、神への信仰のみに基礎を置く信仰のあり方を見出したと言われています。その辺のお話は私の守備範囲ではございませんが、そういう経験があってもなく、ヴィッテンベルクの大学教授になるのです。このヴィッテンベルクという都市については、先ほど城聖堂や、ルターが95カ条の論題を張りつけた扉を見ていただきました。お話したように1度火事にあいましたが、あの場所に扉があったのがヴィッテンベルク大学です。この時代では新しい制度に基づいた、ザクセンのフリードリヒ賢公が新たにつくったこの大学に、ルターは神学教授として赴任することになったのです。

95カ条の論題をなぜ張りつけたのか。その理由は、皆さんよく御存じのように、贖宥状、免罪符の問題に端を発します。この辺のことは省略しようと思いますけれども、その免罪符を売ることで、フッガー家を通してお金が集まっていくのが、教皇レオ10世がこのときにつくろうとしていたローマにある聖ピエトロ大聖堂なのです。ラファエロやミケランジェロが絵を描いている、そういう素

晴らしいものをせっかくつくっているのに、水を差したルターに対して、レオ10世は破門という措置をとります。

先ほど申しましたヴォルムスの帝国会議、ここでルターは目の前に自分の著作を並べられて、「これは本当におまえが書いたのか、これを撤回する気はないか」と聞かれたようです。自分が書いたことは認めたんですけれども、撤回は拒否しました。そこで、すでにお話したように、ヴォルムス勅令、ルターは法律では守られないし、ルターの本を持っていたはだめという、そういう勅令が21年に出されることになります。

その間にいろんなことがありましたが、ルターが改革しようとしたことの中に、結婚の問題があります。25年にカタリーナ・フォン・ボラと結婚し、その後、29年のプロテスタンティオ文書提出の翌年に、「ルターの薔薇」を説明したシュペングラーに宛てた手紙が書かれたことになります。

「ルターの薔薇」のある表紙

繰り返しになりましたけれども、21年のヴォルムス国会から、カタリーナ・フォン・ボラと結婚するまで、ルターはいろいろな本を書いています。表紙に「ルターの薔薇」が描かれている本もあります。このイメージがある、現存する中で一番早いのではないかと言われている表紙〔図4〕には、1524年の年記があって、その年に印刷されたものであることがわかります。

著述そのものは、「親は子供に結婚を強要したり妨げたりすべきではなく、子供は親の意思に反して婚約すべきではない」という内容で、1521年にルターがヴォルムスに到着した時に宿を提供したフランケン地方の騎士ハンス・スコットに宛てた手紙という体裁で記されています。同じく「ル



〔図4〕ルターの著書（1524年）の表紙
ベルリン州立図書館蔵

ターの薔薇」のある表紙が、24年に印刷された『ドイツ国内の市参事会員全てに、キリスト教学校を設立し、運営することを求める』という書簡にも見られます。

表紙の下の方にクラナハという名前が見えますが、彼はヴィッテンベルクの町にいたフリードリヒ賢公の宮廷画家で、彼の工房作であることを示しています。その側にあるクリスティアン・デーリングというのは出版者の名前です。こういう人たちが、この本を出版し、そこに「ルターの薔薇」が使われたのです。

もう一点お見せしている表紙は、大カテキズムと呼ばれる本のものです。ルターは教理問答を意味するカテキズムを二種類書いています。カテキズムは現在でもカトリックでも使われていると思います。ミサとは何かとか、秘蹟とは何か、そういう基本的質問を問答形式でわかりやすく説明しているのがカテキズムなんですけれども、これは29年に書かれたものです。

カテキズムを書いた理由は次のように言われています。21年のヴォルムスの帝国議会からの帰路、ルターは、フリードリヒ賢公によってヴァルトブルク城というところにかくまわれました。その後賢公から、ルター派になってから社会はどうなっているのかを確認する視察を命じられたようです。視察したルターは、ミサも行われていない教会があり、十戒も知らない牧師さんがいたことを大変に嘆いて、もう一度教育し直す必要を感じてこの大カテキズムを書いたと言われています。その表紙に「ルターの薔薇」が描かれ、神秘の子羊と向かい合わせになっています。

ルターは、この子羊の図も好んでいます。ルターのよく使った図像の中に、よき羊飼いとしてのイエスというのが見られます。小カテキズムの方は家庭のお父さんのために書いたと言われますが、そちらには「ルターの薔薇」はありません。

このように「ルターの薔薇」が使われたのは、ある著作がルターのものであるということを示す一種の私的証明として、海賊版から区別するためだったと言われています。いろいろな海賊版や、それからルター以外の著者による書物も数多く出回っていた時期なのです。

さて、これまで見ていただいた表紙は白黒で、木版技法を用いて複数冊出版

されたものです。中にはカラー表紙のものも残っていますが、これはカラー印刷ではなく、本を所有していた人が自分で色をつけた、手描き彩色によるものです。たとえば、ルターがヴィッテンベルクの床屋さん、つまり頻繁に接するよき友ペテル・ベスケンドルフのために、簡単な祈りの方法を書いてあげた本の表紙に、カラーのものがあります〔図5〕。中身は主の祈りと十戒だと言われています。彼に1535年にプレゼントされた本です。



〔図5〕ルターの著書（1535年）の表紙
ベルリン州立図書館蔵

この表紙にはいろいろな人の紋章—個人標章だと思われる—が描かれていて、「ルターの薔薇」の向かいに青銅の蛇をアレンジしたメランヒトンの紋章があります。下にある、鯨に飲み込まれて生還したヨナのある紋章は、ユストゥス・ヨナスのもの、ハーブが描かれているのは、ヨーハン・ブーゲンハーゲンのもの、それから、下にあるリースの中で、オリーブともシュロとも言われる枝をくわえた鳩が描かれているのが、カスパール・クルーツィガーという人のものです。この人たちは、ルターが宗教改革をすすめるにあたって、宗務局といって、カトリックの教皇庁に当たるようなセンターを運営するのを手伝った地元の人です。そういうお仲間が、この床屋さんへの感謝を込めて、ルターお気に入りの図像と共にそれぞれの紋章を集めて表紙を飾り、この本を贈ったのです。

もう一点、カラーの「ルターの薔薇」を見ておきます。こちらは、1561年という制作年代を見ていただいたらわかるように、もうルターもルーカス・クラナハも亡くなった後のものです。チューリンゲンのエーペレーベンのニコラウスという人のためにルーカス・クラナハ（子）が挿絵を描いています。この人物は豪華写本の収集家で、400冊ぐらい写本を持っていたと言われますが、その人のためにわざわざ描かれた聖書の表紙です。この後に、彼自身の肖像や家族の肖像が描かれたページが続く、とても豪華な本の表紙なのです。

ここまできてお気づきかと思いますがけれども、最初に見た「ルターの薔薇」は、

赤い心臓に黒い十字架、白い花だったんですけど、色使いがまったく違うと思われたのではないのでしょうか。床屋さんののは黄金の十字でしたが、ニコラウスの聖書は黒いタウと呼ばれるT字のマークになっています。前者は白い花びらの外側に赤い花びらもあって、床屋さんの方は白い花びらの中に青い花びらもあってという具合に、シュペングラーへの手紙にあったような、はっきりとした規則が最初はなく、みんな好きなように色を着けていたと思われます。そういう状態は、1561年になっても見られ、規則として広まっていなかったことがわかるのです。

つまり、「ルターの薔薇」は仲間内で比較的自由に使われていたのですが、ルター派の諸侯たちが増えてきて、一大勢力の旗印になるに従って、手紙に基づく考証を経た色づかいがなされるようになったと考えるべきではないのでしょうか。

両親の紋章

さて、個人標章であった「ルターの薔薇」のルーツを探るには、先ほど触れたルターの両親の紋章を知る必要があります。マンスフェルトにルターのエルテルンハウス（両親の家）という博物館があります。ドイツでは、ルターの足跡を示す様々な博物館が作られていて、ヴィッテンベルクはもとより、アイスレーベンにも、マンスフェルトにも作られています。マンスフェルトでは、両親の古い家の横に、2014年に近代的な新館が作られて、ここにいろいろなものが展示されています。

古いまま残っている家の入口に紋章らしきものがありますが、すり減っていてよく見えません。新館の展示物にあるルター家が持っていた燭台の台の部分に、鋤と鋏みたいな道具をクロスさせた紋章が見られます〔図6〕。19世紀に制作されたルターの両親の銅版画にも、鋤と鋏をクロスさせた紋章が使われています。



〔図6〕「ルター家の紋章」
燭台装飾、マンス
フェルト、エルテ
ルンハウス蔵

ルターの両親は、もともと自分は農民なんだと、農民であることをすごく誇りに思っていたようです。それからハンスは鉱山の労働者として働いて、ちゃんと働くことを大事に思っていた人なので、こういう紋章を使ったのではないかと思います。後でもまた御紹介しますが、かつて紋章を使うことが許されていたのは王侯貴族や騎士階級で、紋章管理官という役職まであって色や形が管理され、その権利がある人だけ使うことができていました。ところが15世紀、16世紀になると、すでにお話しした個人標章をはじめ、商人や農民など一般の人も自分の印を使うようになったのです。

ところが、マンスフェルトの博物館にあるルターのお父さんの肖像画には違う紋章が見られます。彼は一応ハンス・ルターと言われますが、すでにお話ししたように姓はよくルッダーと言われ、名前もハンスとかユリウスとか、間のクリスチャンネームも含めて史料には複数の表記がある、研究者泣かせの人物です。この肖像画は19世紀のコピーですが、オリジナルはクラーナハ（父）が描きました。父ハンスは1530年に亡くなります。奥さんも31年に亡くなりますが、彼女の肖像画も描かれています。ハンスが亡くなる直前ぐらいには、彼の息子マルティンは既にプロテスタントのリーダー的な存在で、みんなに尊敬されている状態でしたので、クラーナハというフリードリヒ賢公の宮廷画家が、両親の肖像画を描いてくれたそうです。

ハンスは実業家としていろいろと土地を買っていたことも知られており、肖像画には、毛皮を身に着け、手には証文のようなものを持っている、立派な姿で描かれています。ところが、画面に描かれている紋章は、先ほど見た鋤と鋤を交差させたものではなくなっています。2つの薔薇と、半分に切った石弓とを組み合わせた紋章に変わっているのです。

この紋章は、ヴィッテンベルクにあるルターの家、かつてアウグスティヌス修道会の修道院だった建物の入り口の天井にも描かれています [図7]。



〔図7〕「メランヒトンとルター家の紋章」
入口天井装飾
ヴィッテンベルク、ルターハウス

メラニヒトンのT字あるいは十字架に巻き付いた青銅の蛇の紋章と並べて描かれています。マルティンもこれを使っていた可能性は高いのですが、少なくとも、お父さんの肖像画に見られる紋章と同じです。ルター家の紋章が、農民として鋤と鍬をアレンジしたタイプから変更されたということを意味しています。個人標章は、伝統的な紋章とは異なり、使う人の状況の変化に伴って変えられることが可能です。このような個人標章の紋章には、シュペングラーの手紙にあったような説明がないことの方が多く、そのような標章やエンブレムは解釈に開かれている、自由に解釈できる、そういう状態です。石弓というのは武器ですから、武器を割る平和の薔薇を表しているという解釈もできるのではないかと思います。「ルターの家」博物館の方にもお聞きしましたが、はっきりしたことはわかっていないということでした。

しかも博物館の方は、このような2つの薔薇ヴァージョン以外に、3つの薔薇ヴァージョンがあると言われました。3つの薔薇ヴァージョンは、ヤーコブ・ルターという、弟に当たる人が使っていたようですが、それはまだ確認できておりません。少なくとも、マルティンは長男だと言われています。もしかして、お兄さんがいて亡くなったかもしれないんですけど、マルティンが有名人になっていく過程で、父も兄弟も薔薇のある紋章を使うようになったと推測することができます。博物館の方によると、その経緯は明らかではないとのことでしたが、少なくとも父の肖像画が描かれた1530年までの間にルター家の紋章が変わっていたということは確からしいことです。

石弓の方は、ウィリアム・テルの絵本などで良く描かれるタイプのものです。タイプは違いますが、矢を射る道具としての弓は、地上に3本の矢（戦争、病気、飢饉）を放つ怒れる神と共に、この時代に頻繁に描かれています。その道具が半分に切られているので、やはり薔薇が神の怒りを鎮静するように作用することを願っているのかもしれません。

「ルターの薔薇」の薔薇

それでは薔薇は何なのかということを考えるために、先ほど見たマンスフェルトのルターのエルテルンハウスにある展示物、ルター家にあった祭壇装飾を見てみましょう。



〔図8〕ルター家の3連祭壇彫刻
マンスフェルト、エルテルンハウス蔵

これは、聖母子を中心に

左右4聖人が描かれた3連祭壇彫刻です〔図8〕。聖ヤコブは、先ほどお話した弟のヤーコブと関連するかもしれませんが。マルティンは、ル・トゥールの聖マルティネスの祝日の前日に生まれたから、この聖人にちなんで名づけられたようですが、ここにはその聖人は見られません。こういう家族祭壇に示される聖人は、その一族代々の名前と関連するものが多く、それが家族の信仰と関連していて、それにちなんで生まれた子供の名前が付けられるという具合に、聖人を通して名前が繰り返されるのです。

そして、この聖母子像の横に薔薇の装飾があります。こういう祭壇装飾を持つのはかなりお金持の家です。王侯貴族の中には邸宅に祭壇を設置した人もいましたが、一般の人には祭壇画もなかなか持てなかったと思われます。ですから、かなり奮発して購入されたものだと思うのですが、そこに薔薇があることは重要です。薔薇というと、幾重にも花びらがあるもののように思われるかもしれませんが、この時代は大体5つの花弁のシンプルな花として描かれます。もともと薔薇は聖母のアトリビュート（持物）でもあります。カトリックでは、薔薇は聖母をあらわしますので、宗教改革以前に、信心深かったルター家では、それを紋章に使ったのではないかと思います。ルター家の紋章を思い起こすなら、神の怒りを鎮めるのは、とりなしの聖母に期待されたことでもあるのです。

「ルターの薔薇」のハート

さて、2017年はルター年ですので、インターネット上で「ルターの薔薇」が世界中で花開くことを願った、公式の「ルターの薔薇」サイトが立ち上げられていました。その中に、ハート形の由来を説明した図があります。この図では、アウグスティヌスから出たハートが「ルターの薔薇」のハートになって世界中に広がって行く様子が示されています。確かにアウグスティヌスはハートと縁が深く、そしてルターもアウグスティヌス隠修士会に入っていたので強い絆がありますが、十字架を抱いたハートがアウグスティヌスに由来するという説明は、私には納得しにくいところがあります。

アウグスティヌス図像の展開を概観しますと、1435年ぐらいにロベール・カンパンによって制作された絵画《栄光の聖母子》（グラネ美術館、エクス・アン・プロヴァンス）において、現存する中ではおそらく一番早い、ハートをもつアウグスティヌスが描かれていますが、これはハートだけで、ハート内の十字架はありません。この頃は、後で御紹介しますけれども、アウグスティヌスだけではなくて、イエスの聖心、マリアの聖心など、聖なるハートのイメージが登場した時代です。その理由の1つは、おそらくコンスタンツ宗教会議、長いシスマ（教会分裂）を解決に導いたこの会議で新たに認められた、聖体の教義にあると思います。

また、ルターは確かにアウグスティヌス隠修士会に属していましたが、この修道会の設立は、他の修道会と比べて少し遅く、13世紀のことでしたが、14世紀にアウグスティヌスの遺骨が移送されたミラノ近郊のパヴィスの墓廟装飾として、この聖人の形象化がはじまったとされます。そのときに、彼とハート形はまだ結びつけられていないんですが、アウグスティヌスの言葉の中に、「わたしたちの心がこの方（神）にむかって高く持ち上げられるとき、心はその祭壇となり」という文言があり、それが内的で精神的な意味の「心」が、心臓の形に由来するハート形と結びつけられるようになった理由だと考えられます。また、ミサでよく使われる「心をこめて神を仰ぎ」と訳される、「心を高く掲げよ」と

いう意味の「スムスル・コルダ」もこのハート形と関連するようです。

このようにハート形だけが表される場合もありますが、アウグスティヌスのもつハート形には、矢が刺さっていることも多いのです。矢が1本のこともあれば、2本、3本のときもあります。しかしながら、ハートと十字架の組み合わせは、アウグスティヌスの系譜では出てきません。これが、アウグスティヌス由來說を疑問に思う理由です。

ではハート形と十字架はどこで結びつくかということ、例えばイエズス会の図像をあげることができます。日本にありますザビエル像（神戸市博物館）で、彼は十字架が上についているハート形を手にしています。ただしハートと十字架が組み合わされていても、イエズス会では十字架はハートの上に立つのであって、中にはないのです。このような図像は、ドイツで初めてイエズス会の学校が作られた都市インゴルシュタットに数多く残されています。しかしながら、ルターとの関係で申しますと、ルターの最大の論敵と言われたカトリックのマイア・フォン・エックが、インゴルシュタットにいました。インゴルシュタットにはこういう図像が、彼らより前からあった可能性があります。しかし、ルターがそういうところの図像からインスピレーションを得たとは、考えにくいのです。

個人標章の時代

アウグスティヌスでもイエズス会でもなかったら、ハート形のルーツにどのような可能性があるのかということ、これからお話ししたいのですけれども、その前にさきほどから何度もあげている個人標章の時代ということをもとめておきます。紋章そのものは大体12世紀の前半につくられはじめます。英語でコート・オブ・アームズと言いますが、武器（アームズ）の上にかけるコートを意味します。例えば王侯貴族が、よろいの上からはおるマントや、馬衣や、かぶとを覆う布に紋章を描かせて、戦場での敵味方に自分が誰であることを示すために用いていました。その後、13世紀ころから商人や職人などの一般人に広がっていきます。

紋章に詳しい研究者ミシェル・パストゥローという人が、再編途上にある社会、つまり中世から近代にかけての再編途上にあるこの頃の社会で、個人を集団の中に位置づけ、集団を社会の中へ位置づけるというそのプロセスにおいて、こういうマークが必要とされたということを書いています。

そうした中、個人標章が流行いたします。個人標章は、中世末のフランスではドゥヴィーズ、英語で言うところのデヴァイスということになるんですけどドゥヴィーズと書く人が多いのは、フランスでかなり流行したためです。今ではデヴァイスというと紋章に付された標語を指しますが、このころは、紋章を構成する図柄と色と、それから文字による標語、これら3つを合わせてドゥヴィーズといいました。これはいわゆる世襲の家紋ではなくて、都市や宗派など集団のマークでもなくて、個人が使う多分に遊戯的なものです。個人で複数のドゥヴィーズをもったり、状況の変化に合わせて変えたりして用いられました。私が知っている例では、犯罪に連座したかどで捕まった人が大物の口利きで釈放されたのですが、そのことを記念して鎖をあしらった紋章を使うようになった例があります。そのように、個人的な感情に寄り添って、自由に使われた徴がドゥヴィーズなのです。絶対に外形を変えてはいけない家紋とは、少し違うタイプのものです。

すでに述べたように、「ルターの薔薇」は、もともとドゥヴィーズだった可能性が高いと思われます。ルター家は家紋を持つような家柄ではなかったのですが、貴族の習慣をまねて紋章を使うような職種の人々が一族に少なくなかったため、奮発して詠えた祭壇装飾の薔薇を使って紋章を工夫したのではなかったかと推測しています。個人標章はすごく人気があって、14世紀の半ばから記録にも現れはじめます。16世紀になりますと、イタリアではインプレーサと呼ばれ、やがてエンブレムとして流布していきます。そういう個人標章流行の時代ですから、一家にとって意味のある、聖母子を飾った薔薇を用いた可能性は高いと思われるのです。

ジャン・ジェルソンの紋章

個人標章的紋章に関して、1416年にジャン・ジェルソンが同僚に宛てた手紙の中で、自らの紋章について説明している文章が残っています。

1416年というのは、すでに触れたシスマが解消されるコンスタンツ宗教会議が開かれた年なのですが、今回の話題に関連して注目すべきこととして、このとき聖体に関して重要な問題が話し合われています。ミサのときに拝領する聖体に関して、イエスがこれを私の血だと思って飲むように言ったブドウ酒と、パンを割って、私の体だと思って食べるように言ったパン。このブドウ酒とパンの2種類の聖体がそれまでのミサでは拝領されていたのですが、コンスタンツ宗教会議では、どちらか一方で二種を兼ねることが認められます。ブドウ酒だけでも、そこにパンの要素が含まれていて、パンだけでもブドウ酒の要素が含まれる、そういうあり方でいいということになったのです。後に異端とされるフス派などは猛反対します。こうしたコンスタンツ宗教会議のころ、すなわち15世紀のはじめに、ハート形の宗教的イメージが数多く出てくるのは、ちょっとがった見方かもしれないのですが、ハートが血でも肉でもある存在だからなのではないかと思うのです。

ジャン・ジェルソンがコンスタンツ宗教会議に参加するときの巡礼者としての姿が、フランスでは、1429年の木版画〔図9〕に残っています。ほぼ同じ図柄をドイツでは、デューラーが1494年頃に木版画にしています。先ほどアウグスティヌスに関連して「スルスム・コルダ（心を高く掲げよ）」のお話をしましたが、この言葉はジャン・ジェルソンも、自著の表紙の銘文で使っており、その表紙で彼はハートを持って十字架の前にひざまずいています。



〔図9〕《巡礼姿のジャン・ジェルソン》
(1429年)、パリ国立図書館蔵

「ルターの薔薇」に見られるハートは、ジャン・ジェルソンとかアウグスティヌスのものとは違うと考えているのですが、ジャン・ジェルソンの紋章の説明に話を戻します。彼が手紙で説明しているのは、図の中で巡礼者姿の彼が手にしている盾形紋章の意味です。カラーのイメージでは残されていませんが、説明では個人標章に不可欠な色についても語られます。「蒼空の信仰の盾」に「金のT字が刻まれた赤みがかった心臓」があり、「その心臓には翼があり」、「神の愛によって熱せられて、太陽や月へと上っていく」。心が上っていくことを含むイメージを述べているのです。

このような自らの個人標章の説明は、世俗の人でもそれほど多くなく、宗教者ではジャン・ジェルソンの手紙がはっきりと残された一例となっています。ルターの研究者の中には、ルターがジャン・ジェルソンの先例を知っていて、シュペングラーへの手紙で、自分の紋章の意味や、色づかいを説明したのではないかと言う人もいます。そうすると、ルターは先例に倣ってかなり意識的に個人標章を作った可能性がでてきます。

クラーナハのペスト図



〔図10〕クラーナハ（父）《ペスト図》
（1505年）、ドイツ個人蔵

さて、「ルターの薔薇」のハートが、アウグスティヌスのものとも、ジャン・ジェルソンのものとも違うと言ったときに、私の脳裏にあったのが1505年にルーカス・クラーナハがヴィッテンベルクに来て、ザクセン公の宮廷画家になった時に制作した木版画です。着任早々に、ザクセン公に命じられてつくった、ペスト図（疫病撃退図）〔図10〕と呼ばれる図像です。

ペスト図は、ペストや疫病を退ける、そういう役割が期待される図像です。ペストがとても流行っていて、多くの人が亡くなっていたので—こ

ういう絵とかお札が役に立つかどうかわかりませんがザクセン公としては、疫病撃退を期待して、デューラーやハンス・ブルクメイヤーにもペスト図を描かせています。大腿部に傷があるロクスという聖人がいると、ペスト図の機能が期待されたものだということがわかります。

1505年のペスト図では、聖母マリア、福音書記者ヨハネ、聖セバスティアヌス、聖ロクスが、天空に浮かぶ大きな盾の下で地面にひざまずいています。セバスティアヌスは、身体中に矢が突き刺さっても死なず、最後に剣で殉教するのですが、身体を傷つける病気や怪我に対する守護聖人として知られています。ロクスは、ペスト患者たちを看病して自らもペストで亡くなるので、特にペストに対する守護として知られる聖人です。空中の盾の中には大きなハートがあって、その中に十字架にかけられたイエスが描かれています。

クラーナハのもうひとつの《ペスト図》(油彩、国立西洋美術館、ブダペスト)も興味深く、これを見てからまた木版画に戻ります。ここでは天から神が3本の矢を人間に向かって放とうとしています。すでに述べたように戦争、疫病、飢饉という三大災厄を意味しています。それらを神が人間へ向けて放つという厳しい、それまでのカトリックが描いてきたものとは少し違う神が描かれています。カトリックの場合も時期や場所によって様々ですが、たとえばゴシック末には天国で神のかんばせを見ることに最終的な至福があるとされるので、そこに到達するまでの過程で攻撃的な神が描かれることはなく、天国でまみえるのも優しそうな顔です。しかし、ルター派周辺で描かれる神は厳しく、どちらかというと、古代の、初期キリスト教時代の神に近いと言われます。宗教改革が、ある意味で宗教のルネサンスだと言われるのは、こういうことが含まれるのかもしれないと思われる神の姿です。そこに、「もう私が十字架にかかりましたので、人間をお許してください」と祈っているイエスや、また、マントの下にいろんな人をかくまっている聖母の姿があります。ですから、聖母にお祈りをして、聖母が仲介者としてイエスにお祈りをして、イエスが神に、もう私がみんなの罪をあがないましたと祈っている、カトリックの位階的な図なのです。

不思議なのは、聖母のマントの下には被っている冠から教皇だとわかる人が

います。制作年の1516～18年という年代を見ますと、宗教改革間近というところで描かれた作品ですが、ザクセン公の宮廷画家クラナハは、教皇庁にすぐ反抗するという立ち位置にはなかったことが、こういう画想からわかります。ルター自身もそうだったと言われるように、はじめから教皇庁に逆らうという意図はなくて、徐々にそうになっていったことが、このような絵画を見れば納得できます。そして聖母マリア信仰についてもそのように考えられるのです。

マリアの聖心

1505年のベスト図にあるハートを私は、マリアの心、聖心ではないかと思っています。その理由は描き方にあります。不思議な心臓の描き方で、左半分は陰影のつけ方から、丸々とした膨らみを感じさせます。右半分には何か全体を覆うちろちろとしたものがあります。上部では一よく上から炎が噴き出しているハート図はあるんですけど—ここではその噴き出し口にイバラの冠のようなものが被せてあります。

このような、ハートの中に十字架があるイメージは他にもありまして、聖母マリアと書かれた銘文帯が添えられています。1505年の木版画にもリボン状の銘文帯に聖母マリアと書かれたヴァージョンがあることが知られています。版画は第1ステート、第2ステートというふうに、刷りの段階を示す言葉がありますが、第1ステートにはあった「聖母マリア」の文字が、第2ステートでは消えているのです。それは後から消されたということを意味しているようです。民間信仰に関係する別の木版画には、形はよく似ていますが、聖母ではなく愛の女性寓意像にかかわるハートが描かれているものもあります。

さて、1505年の木版画の、左右で表現が異なっていたハートを、半分に切り分けて反転したものを合わせると、左半分からは何か喜ばしい感じがする丸々としたハート、右半分からはちろちろとしたものが全体を覆うハートが出来上がります。そして上部に冠があるという状態です。これが意味するのは、カトリックの聖母の15玄義ではないかと思われるのです。聖母の15の体験が5つずつのグ

ループに区分され、それぞれを聖母の喜び、聖母の悲しみ、聖母の栄光ととらえて聖母にとりなしを祈る仕方があり、これはロザリオの祈りにも関係するものです。丸々と膨らんだハートが聖母の喜びを表し、ちろちろとしたものを私は涙と解釈いたしまして、涙に覆われたハートが聖母の悲しみを、そして冠が聖母の栄光を表すと捉えることができます。

ちろちろしたものの解釈をめぐるいろいろな説がありまして、炎じゃないかとか、聖霊じゃないかというものもありました。これを涙と見るための、形の上での援用イメージとして、マリー・ド・クレープという人の写本中のドゥヴィーズを見ておきます。これは「三色スマイルと涙」と呼ばれている恋愛に関係するドゥヴィーズですが、上から落ちてみたいに描いている涙を上下逆さにすると、その形がちろちろとしたものに似ています。木版画では聖母が下にいるので、涙が下から上へと流れていると見ると涙と言えるのではないかと思いましたので、このペスト図のハートは、実は聖母の聖心ではないかと考えています。

聖母は、心の中でいつもイエスを思っていて、イエスを授かった喜びの気持ちと、イエスの死を嘆く悲しい気持ちと、そういう栄光—最終的には勝利と見ます—を誇らしく思う三種類の気持ちを、イエスに関連してもっていたと言われますから、このハートはその心の内を表すのではないかと思うのです。

これに先行する図像はベルギーに数多く見られます。聖母が地上で祈っていて、空中に浮かぶ形を私は白い聖心と解釈したいと思います。赤ではありませんが、なぜ白を使うかは後で述べることにします。その中に十字架があって、アルマ・クリスティと呼ばれる受難の道具を天使たちが持ってきています。このタイプにはさまざまなヴァージョンがあり、いずれも祈る人が聖母にとりなしを願っているのです。十字架が聖母の心にある状態を示しているこれらの図像は、やはり15世紀の第1四半期ぐらいに登場し、第2四半期、15世紀半ばと現れ続けます。

聖心のイコノロジー

このようにハートの中に十字がある図像は、聖母の聖心に関係するのではないかと考えていますけれども、そのように考える場合のハートとは何かということ、ざっと述べておきたいと思います。『聖心のイコノロジー』（関西大学出版部）という本に書いたことの概略です。

そもそも心臓を精神的な意味の「こころ」に結びつける習慣はいろいろなところにあります。西洋だけではなくて、中国、インド、メソポタミアなどでも見られます。西洋においてはまず、文学や哲学関係の文字による叙述に登場し、聖書にも数多くの聖心に関する記述があります。プラトンの愛の理論にも登場します。すでにお話した5世紀のアウグスティヌスから10世紀までは、しかしながら、ほとんど見られません。

10世紀になりますと、西洋以外の地域との接触が出てくる中で、文学では『エッダ』、『ローランの歌』、トルヴァトゥールの抒情詩などの中世文学において、愛憎の機微がハートであらわされます。それと並行して、身体の問題として外科的対象としての心臓が論じられます。こうした中で、愛をハートであらわす文学の系譜に、多くは写本挿絵として造形的に描かれたハート形が現われます。確認できているものとしては、14世紀くらいにもっとも早い例が見られます。

宗教的なキリスト教の文脈では、言説によるものはもちろんアウグスティヌスがあり、その後中世の神秘主義、たとえばシトー会のクレルヴォーのベルナルドゥスとかサン・ヴィクトル派の言説に見られます。注目したいのは、ザクセンのヘルフタ修道院にいた女性の神秘家たちの叙述です。この中に、聖母の白い聖心の記述があります。白く光に包まれているというものですが、わざわざそのように書いているのは、世俗のハートが赤で描かれるものですから、混同されるのを避けるためだったのではないかと推測しています。宗教的図像におけるハート形の流れでは、聖愛あるいは慈愛を意味する赤いカリタスのハート形があって、すでに述べた事情で15世紀のはじめにイエスの聖心のイメージが登場すると同時に聖母の白い聖心のイメージも生まれ、その延長上に「ルター

の薔薇」のハートが位置づけられると考えているところです。

具体的なイメージを、いくつかの作例に見るなら、世俗の愛のハートの早い例は象牙ケースなどの装飾で、心臓を差し出ししながら愛の告白をしている場面に見られます。現在のハート形は上がふたつの山型になりますが、上下逆にして心臓を差し出しているものもあれば、現在と同じ向きのものもあります。

アッシジのサンフランチェスコ聖堂の天井壁画にジョットが描いた目隠しをした「盲目のクピド」も、「貞節」にしたがう人物たちによって奈落へと突き落とされながら、世俗的愛の心臓をたくさんぶら下げています。

文学の写本挿絵にも数多くの例があります。クリスティーヌ・ド・ピサンの『オテアの手紙』の挿絵において、ヴィーナスの子供たちが彼女に愛の心臓を差し出している例や、『愛に囚われし心の書』と呼ばれる寓意文学の挿絵でも数多くのハート形が見られます。赤いハート形というのは、精神的なことがらを捉える上で非常に有用なものと思われていたのですが、キリスト教関係の人には危険な代物とみなされていたようで、文字による心の叙述は聖書にたくさん登場しますが、図像であらわされることは少なかったのです。

宗教図像の早い例としてスクロヴェーニ礼拝堂にジョットが描いたカリタスがあります。単色技法であるため赤いハートではなく、よくよく見ると表面に血管が浮き出していて、いわゆる愛のハート形にはなっていない、わざわざなっていないようにしている図像のひとつです。

それからロレンツェッティが描いたカリタスの寓意像(シエナ市庁舎ほか)もハート形を持っています。そのカリタスですが、何となく世俗の愛の表現に近いような、近くないような表現になっています。そういう微妙なところが、ロレンツェッティの描き方で、ルネサンス期の曖昧なところかもしれません。カリタスと世俗の愛の表現をきっぱりと描き分けていない状態を、こういう図像から見てとることができます。

カリタス以外の宗教図像ではどういうふう描かれたかという、例外は多々あるものの、すでに述べたように聖体に関連した描き方がされています。

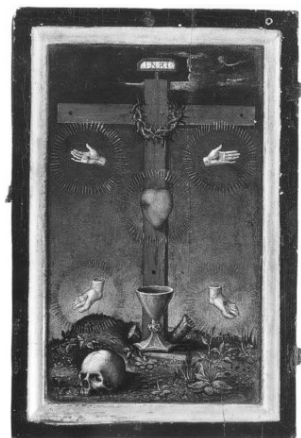
聖体について記された木版画では、十字架の下に傷ついたハートが描かれて

います。聖なる槍の信心会周辺で制作された聖槍図では、槍で刺された心臓の中で、イエスが育っている（信仰心が育つ）イメージがあります。聖なる心臓は、大体こういうふうに傷ついています。槍がイエスの心臓に達したという記述は聖書にありませんが、心臓には傷があったり、傷にホスチアが挟まっていたり、ジェルソンの心臓みたいに翼があったりさまざまです。同じハート形を描く場合でも、聖心の図像は世俗の愛の図像から区別できるように、赤い色を使っても傷のあるものが多いのです。

南ドイツで一番早い聖心イメージと言われるレオナルド・フォン・ブリクセンが1464年にメラウムの聖ヨハネ教会に描いた壁画の《最後の審判》では、十字架にイエスの姿はなく、ハートだけが描かれて



[図11]ブリクセン《イエスの聖心のある最後の審判》壁画（1464年）
メラウム、聖ヨハネ教会



[図12]逸名の画家《聖痕とイエスの聖心がある磔刑》2連画屏絵（1523年頃）
アムステルダム個人蔵

います[図11]。同じようなコンセプトのものとして、「マгдаラのマリア伝の画家」による1523年頃の《ウィレム・ファン・ビボウトの2連画》の扉には傷つけられたハートと手足だけが描かれています[図12]。

こうしたイエスの聖心と並んで、聖母の聖心のイメージも生まれていたのも、聖母の心の中にある十字架というイメージが、実際にルターが見ることのできたクラーナハのペスト図からの刺激もあって、「ルターの薔薇」という個人紋章に結実した、つまり薔薇は聖母を、十字架のあるハートは聖母の聖心と見ることができるのではないかと

考えます。

ルターと聖母マリア

このように見なす理由がもう一つあります。すでに各種著書の表紙で見えていただいたように、「ルターの薔薇」が出てきた時期は遅くとも1524年頃です。21年のヴォルムス帝国議会に際して、ルターは捕まってローマに送られるかもしれないが、選帝侯の甥であるヨーハン・フリードリヒという、このころまだ17歳ぐらいの少年が、絶対にルターをローマに送らないでほしいと伯父の選帝侯に懇願したことが知られています。ヨーハン・フリードリヒは、祈りの中で自分を覚えてくださいとルターに頼んだということがありますので、この頃ルターは、彼のために『マグニフィカートのドイツ語訳並びに講解』という本を執筆しています。これは一古い訳しかチェックできなかったのですが、昭和16年に第1版が出た岩波文庫の中に一『マリアの讃歌』と訳されています。

「ルターの薔薇」を個人紋章とした1520年代の前半に、ルターはまだマリア崇敬の気持ちを強くもっていたと思われます。そして、このマグニフィカートのいろいろなお祈りで使われる文には「我が心は主をあがめる」という言葉、マリアが自分の心は主をあがめますという意味の言葉が含まれています。したがって、「ルターの薔薇」の起源をマリアの聖心に見ることは、さほどおかしくないと思自は思っているのです。

「ルターの薔薇」の成立事情

長々とお話ししてまいりましたが、最後に成立事情をまとめますと、16世紀には、ルターの両親をはじめ都市の住民や農民も紋章や個人標章を持つ時代になっていました。ルターがいくら95カ条の論題を扉に張りつけても、ラテン語を読める人は本当に少なく10%ぐらいだったと言われていますが、むしろ紋章などの造形イメージの方が伝わりやすいということを、ルター自身も自覚してい

たと思われます。

ルターの両親は、長男のマルティンが聖職者になったころ、自宅にあった祭壇画の装飾に基づき、薔薇の花をアレンジした紋章—半分の石弓に、薔薇が2つ、あるいは3つ組み合わせられたもの—を使い始めたと思われます。

その一方で、ルターを応援したザクセン選帝侯フリードリヒ賢公の宮廷では、「十字架を抱いた聖母の聖心」をモチーフとしたベスト図が宮廷画家クラナハによって制作されていました。木版画ですので複数印刷されて、主だったところに配られたものと思われます。さらに21年のヴォルムス国会で発せられたヴォルムス勅令を受けてザクセン公にかくまわれていたころ、ルターは『マリアの讃歌』と呼ばれる『マグニフィカートのドイツ語訳ならびに講解』という著作を、彼に心酔して助けてくれたヨーハン・フリードリヒのために執筆していました。そのルターの脳裏には、著述にもあるような、マリアがその心で主をあがめるという観念があったと思われます。こうしたイメージや言葉の記憶に基づき、24年までには自分の著書の表紙で、個人標章「ルターの薔薇」を使い始めていたのです。この辺りの事情は、非常に個人的な思いに端を発しています。

しかしながら、29年にヴォルムス勅令が強化され、プロテスタントという名前を諸侯たちが使うようになったときに、「ルターの薔薇」はルター派の紋章として機能することになります。ルターはおそらく、ジャン・ジェルソンの先例にならって、イメージの説明を記すのですが、その説明には聖母の聖心という観念は含まれていません。聖母信仰はカトリックでは非常に強かったものの、プロテスタント派では、はなはだしい場合にはイエスよりもマリアに注目が集まり困るということで聖母信仰を抑える傾向がありました。30年にシュペングラーへの宛てた手紙に書いた説明で、一切聖母に触れないことで、ルターはイメージの源泉にあった聖母の聖心を封印したのではなかったかと思うのです。

そして、このイメージは戦争のときの旗印や、教会におかれる公的イメージとして機能しはじめたのではないかと考えております。これで私のお話を終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。